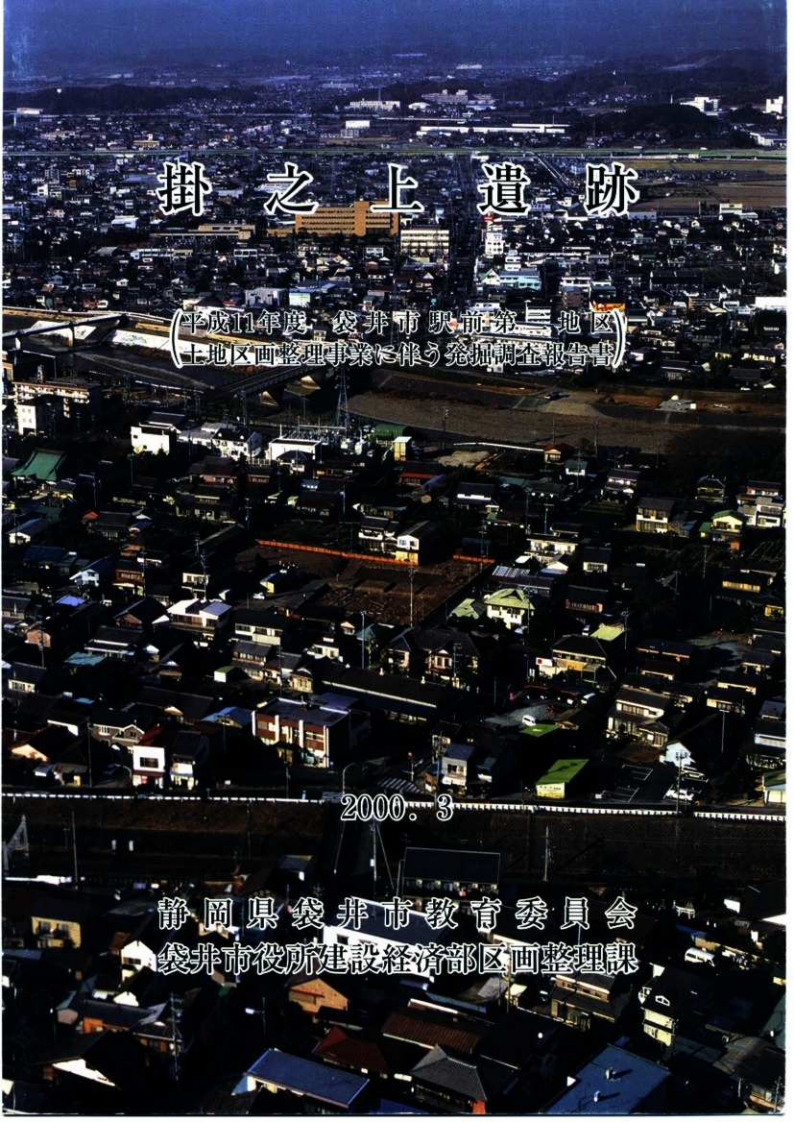


掛之上遺跡

（平成11年度 袋井市駅前第二地区
土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書）

2000. 3

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所建設経済部区画整理課

掛之上遺跡

（平成11年度　袋井市駅前第二地区
土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書）

2000．3

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所建設経済部区画整理課

例　　言

1．本報告書は平成11(1999)年９月15日～平成12(2000)年３月31日の期間に、袋井市高尾970番地外で実施された掛之上（かけのうえ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う遠州中央農業協同組合袋井南支店の移転予定地内のうち遺物包含層を破壊する建築物建設予定地の発掘調査である。なお、本工事計画のうち支店駐車場・緑地予定地については工事が遺物包含層まで到達しない設計のため、遺跡は保護されるとして発掘調査は実施されないこととなっている。

3．発掘調査は静岡県教育委員会文化課の指導を受けて袋井市教育委員会が実施した。

4．今回の発掘調査・報告書執筆は永井義博（袋井市教育委員会）が担当した。

5．掛之上遺跡における今までの発掘調査履歴は次のとおりである。

発掘調査	調査年度	発掘調査の原因	調査関係者
第１次調査	昭和49年(1974)	袋井駅前地区土地区画整理事業(当時は狐塚遺跡)	大谷純仁 川井正一
第２次調査	昭和57年(1982)	個人住宅建築(文化庁・国庫補助事業)	寺田義昭 松井一明
第３次調査	昭和63年(1988)	袋井駅前地区土地区画整理事業(道路部分)	吉岡伸夫 松井一明
第４次調査	平成９年(1997)	原野谷川護岸改修工事(県袋井土木事務所関連)	飯塚晴夫 （埋文研）
第５次調査	平成９年(1997)	袋井市駅前第二地区土地区画整理事業(試掘調査)	永井義博

6．掛之上遺跡の発掘調査報告書は上記の調査に順じて、第１～５次調査と表記されてきたが、本年度から開始された区画整理事業関連の発掘調査は複数年の調査になるため、以前の調査とは別に該当年度で表記することとし、発掘調査報告書に本年は「平成11年度調査」、2000年は「平成12年度調査」として出土資料の分類を行っていきたい。なお教委遺跡略号は「ＴＫＵ」である。

7．現地の発掘調査にあたっては遠州中央農業協同組合の皆さん、特に袋井南支店長早川初好氏には大変お世話になった。ここに記して感謝したい。

8．また、区画整理課の皆さんには区画整理事業と埋蔵文化財調査の円滑な調整について企画段階から発掘調査終了まで多大な理解と協力を得た。特に駅前推進係の金原基弘氏、兼岡正利氏、松井純二氏にはたびたび発掘現場まで足を運び調整にあたっていただいた。

8．袋井市教育委員会側の発掘調査体制は次のとおりである。(敬称略)

教育長　浅井通男　　教育次長　藤田代行　　生涯学習課長　小粥保夫
課長補佐　高木雅之　　主査　永井義博　　主任学芸員　松井一明
主任学芸員　水野雅彦　　学芸員　白澤崇　　経理事務　鈴木寿美子

(掛之上遺跡調査参加者)　浅野しづ江　宇津山芳子　兼岡進　大庭嘉平　窪野くに子　窪野啓子
笹川みどり　桑原暁美　鈴木嶺子　鈴木善巳　寺井健次　戸倉百合江
中川計吉　名倉保子　山下忠義　山本英治　山本隆二　山下悦子
大庭京子　高木啓子

9．本発掘調査は静岡県教育委員会教育長杉田豊より袋井市長豊田舜次あて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工等事について（通知）」(教文第２－５１号・平成11年６月８日付け）の指示によるものである。

10．平成11年度　掛之上遺跡発掘調査の資料は袋井市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　発掘調査に至る経過 …… 1
第２章　調査の経過 …… 2
第３章　調査の方法 …… 3
第４章　地理的環境・歴史的環境 …… 4
第５章　遺　　構 …… 5
第６章　遺　　物 …… 6
第７章　まとめにかえて …… 7
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　掛之上遺跡位置図（1／50,000）
第２図　掛之上遺跡発掘調査の位置（1／2,500）
第３図　掛之上遺跡発掘区全体図（平成１１年度調査）
第４図　方形周溝墓（ＳＸ１．ＳＸ２）実測図
第５図　環濠（００１）遺物出土状況図
第６図　大型掘立柱建物跡（ＳＢ１．ＳＢ２）実測図
第７図　掘立柱建物跡（ＳＢ３）実測図
第８図　方形周溝墓（ＳＸ１．ＳＸ２）出土遺物実測図

写真図版目次

図版１
（１） 発掘調査区全景。(北より)

図版２
（１） 発掘調査地遠景。(東より)
（２） 発掘調査の開始。(表土除去作業)

図版３
（１） 方形周溝墓（ＳＸ１）全景。(西より)
（２） 方形周溝墓（ＳＸ１）の北側溝。(ＮＯ．０３４)

図版４
（１） 溝跡（０３４）の発掘状況。
（２） 溝跡（０３４）出土の弥生中期土器。

図版５
（１） 環濠（００１）の調査状況。
（２） 環濠（００１）出土の弥生後期壺形土器。

図版６
（１） 環濠（００１）出土の土器。中間層より出土する。
（２） 環濠（００１）出土の土器集中地点。

図版７
（１） 大型掘立柱建物跡ＳＢ１。(北より)
（２） 大型掘立柱建物跡ＳＢ２。(南より)

図版８
（１） 大型柱穴跡（ＮＯ．１１２）近景
（２） 大型柱穴跡。中央が２６７、左が２６６、手前が２６５となる。

図版９
（１） 掘立柱建物跡（ＳＢ３）の調査状況。
（２） 掘立柱建物跡（ＳＢ３）の完掘状況。(南より)

第１章　　調査に至る経過

袋井市高尾地内に所在する掛之上遺跡は「袋井駅前第２地区土地区画整理事業」に伴って、平成11(1999)年度より発掘調査が開始された。発掘調査に至る経緯は次のとおりである。

平成９年10月16日に市建設経済部区画整理課と教育委員会生涯学習課の間で袋井市で計画されている区画整理事業と埋蔵文化財との調整をとるため「土地区画整理事業と埋蔵文化財打合せ」が袋井市役所内で行われたのが最初である。この時、すでに調査を開始していた春岡遺跡の進捗状況から、今後、計画されている区画整理事業と埋蔵文化財発掘調査との調整を計るための重要な機会であった。この時点では、①袋井市春岡土地区画整理事業、②袋井駅前第二地区土地区画整理事業、③袋井インター南土地区画整理事業、④袋井市祢宜弥土地区画整理事業、⑤袋井市上石野土地区画整理事業、⑥袋井市久野北土地区画整理事業、⑦袋井市駅南（第一・第二）土地区画整理事業が予定されておりいづれも所在調査・試掘調査を必要とする案件であった。

今回の対象地である袋井市高尾地内（掛之上）にて計画された袋井市駅前第二地区土地区画整理事業が行われる範囲は、静岡県遺跡地図によると周知の文化財「掛之上遺跡」の範囲内にあたり、以前より地元の人々より畑の耕作で土器が採集されたり、小規模開発に伴って事前の発掘調査が行われている地域であった。ここで言う過去の発掘調査とは、昭和49年(1974)７月17日より12月17日の期間で「中遠広域都市計画事業袋井駅前地区土地区画整理事業並びに中遠広域都市計画道路の建設」に関連して、掛之上地区の原野谷川に面した狐塚古墳（前方後円墳）とその周辺遺跡（後に狐塚遺跡の命名される）が川井正一氏（現在、茨城県在住）により発掘調査されたのが最初の調査である。

さて平成９年２月４日付け袋区第 126号により埋蔵文化財の所在の有無の分布調査の依頼を受けた袋井市教委は平成９年２月13日～２月18日に現地の遺跡所在調査を行い、周辺の聞き取り調査や地形・地質の観察等より現地が掛之上遺跡の範囲である可能性が高いと回答した。

この所在調査の結果に対して遺跡範囲を確定するため平成９年４月28日付袋区30号にて区画整理課より「埋蔵文化財等文化財の試掘調査の依頼について」が提出され、平成９年５月16日～５月21日にかけての６日間で重機による試掘調査が事業地内26ケ所で実施された。その結果、区画整理事業計画範囲のうち、かなり広い範囲より遺構・遺物が発見されたため、ここを発掘調査の必要な範囲として調査計画書を区画整理課あて回答した。

発掘調査に取り掛かるため平成11年５月６日付けで袋井市長豊田舜次名（区画整理課扱）で文化庁長官宛て「埋蔵文化財発掘の通知について（掛之上遺跡）」（文化財保護法57条の３の規定）が提出された。これを受けて平成11年６月８日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（掛之上遺跡）」の通知が静岡県教育委員会教育長杉田豊名で袋井市長あて送付され、区画整理事業着手前の発掘調査が正式に指示された。

そして、平成11年８月20日袋区第59号にて袋井市役所区画整理課長金原重三郎名で「埋蔵文化財等文化財の発掘調査の依頼について」が遠州中央農業協同組合代表理事組合長山崎春太郎名の発掘承諾書、平面図、基礎断面図等を添付して提出され、遠州中央農業協同組合袋井南支店の新店舗建設予定地の発掘調査が開始された。

さらに、発掘調査が開始されたところで袋井市教育委員会より「埋蔵文化財発掘調査の通知について」（文化財保護法98条の２の規定）が静岡県教育委員会宛て通知された。

第２章　調査の経過

平成11年６月４日　遠州中央農業協同組合より「袋井農事センターほか跡地管理委託について」が提出され、埋蔵文化財発掘調査のため袋井市高尾掛之上９７０他の土地管理が袋井市に移管された。

８月22日　区画整理課より正式に平成11年度の発掘調査依頼書が提出される。

９月３日　文化財保護法９８条の２・関連の届け出が袋井市教育委員会より静岡県教育委員会あて行われる。

９月21日　発掘準備のため現場の草刈り作業開始。

７月27日　重機による表土の除去作業が開始される。

10月１日　作業員により遺物包含層の掘下げ作業が開始される。

10月13日　袋井市文化財保護審議委員小杉達先生来訪される。

10月21日　近世・近代の暗渠等について除去する。

10月22日　包含層の除去の目処のついたところから作業員による遺構確認作業を開始。

10月25日　各遺構の発掘作業。溝跡００１や柱穴跡の調査を開始する。

10月27日　雨天中止。

10月28日　調査員出張のため現場休み。

10月29日　環濠００１、土壙００２の調査を行う。

11月５日　調査区東側のピット群の調査を行う。このころより天候不良。

11月15日　排水作業とドロ土の除去。ピット群の調査を行う。

11月24日　雨天で作業中止。排水作業に追われる。

12月６日　大型掘立柱建物跡のピット群の発掘。

12月７日　掘立柱建物跡のピット群の発掘。

12月８日　写真撮影用の清掃作業。

12月９日　写真撮影用の清掃作業。

12月10日　空中写真測量実施。ラジコンヘリによる鳥かん写真撮影。

12月13日　発掘器材の撤収作業。

12月20日　溝跡００１の土器取り上げ作業。

12月21日　溝跡００１の土器取り上げ作業。２日目。

平成12年１月７日　袋井南小学校６年生１１０名の遺跡見学会。

１月13日　発掘区画の埋め戻し作業開始。

１月18日　プレハブ・仮設トイレの撤去作業。

１月31日　給排水施設の撤去作業。その後、発掘調査用地を農協に返還する。

２月１日　発掘調査出土品資料整理及び発掘調査報告書執筆開始。

３月１日　発掘調査報告書印刷契約の締結。

３月10日　報告書原稿再校正。

３月17日　報告書原稿再々校正。

３月28日　発掘調査報告書完成。

第3章　調　査　方　法

今回の発掘調査は、駅前第二地区土地区画整理事業に伴い遠州中央農業協同組合（ＪＡ遠州中央）袋井南支店の移転工事のため建設予定地（東西約26.5m×南北約25.0m、面積約675㎡）を発掘調査するものである。現況は袋井市高尾９０７番地の農協の農事センター、茶販売所等が建っていた敷地に、陸橋脇より南支店を移転することとなり、平成11年４月～５月にかけて遠州中央農業共同組合の手によりこれらは解体撤去された。その後、南支店の設計は決まっていなかったが、概要のはっきりした段階で土地所有者の発掘調査承諾書と共に発掘調査依頼書（建設経済部区画整理課長名）が８月20日付けで提出された。

現地はすでに平成９年度の試掘調査成果により地下の遺構や遺物のおよその出土状況が把握されていたため、発掘調査の開始より重機で約40cm下の遺物包含層まで一気に掘削することとした。

重機の掘削後は作業員の手作業にて遺物の包含層を約３cmの厚さで掘り下げていき、精査を重ねて住居跡・柱穴跡・溝跡などの検出に努めた。ただし、隣接する地区では中世の遺物も出土していたので上層での遺構確認も行った。

今回の発掘は低い丘陵上といえる場所で湧水の心配は当初から無かったが、近世・近代の排水溝や排水暗渠が残っておりそれを伝って隣接地よりわずかづづ水が流れ込むことがあったが、１週間ほどでその水も止まった。天候も安定している時期でもあり、調査区も狭いため周囲に排水の溝を切ることもしなかった。これは後に環濠００１の調査で遺構の重要部分を破壊することなく堀り上げることができたなど利点が多かった。そして、環濠００１が調査区北西から東南に向けてＬ形に検出されたためこれが排水溝の代わりとなった。調査区西側に２ケ所の集水ますを設けて小型２インチポンプを１基づつ常時設置したがこれが10月の大雨の時に自動排水でたいへん役に立った。

安全管理は現場が住宅地であるため重要であるが、建物解体工事に伴い農協の土地全体を工事用フェンスで囲まれたためこれを利用して、外部からの立ち入りが一切できないようにした。当然、入口にはカギを掛けて関係者以外の立ち入りを禁止した。

その他では土砂を大量に含んだ遺跡の水を、市街地で排水作業する場合は注意が必要で、集水ますでドロをなるべく沈殿させ、排水路もなるべく幅が広く傾斜のある場所を選んで流すように努めた。おなじく掘り出した土は風で飛ばされることがあるため、重機で掘削した土は低く積みキャタピラで押圧し、作業員の堀り出した排土は遺構がない部分の地面にピットを作って投棄するようにした。

遺跡の測量・写真撮影については、４０分の１、１００分の１の遺構測量図の作成はクレーンを使用して空中写真測量を行い、鳥かん写真の撮影についてはラジコンヘリコプターを使用して行った。１０分の１，２０分の１の遺物取り上げ図や遺構詳細図については調査員の手作業により実測を行った。この結果、遺構平面図は４０分の１の図を基本として、土器の集中出土地点については１０分の１の詳細図を作成することとなった。レベル等については㈱フジヤマの設置したベンチマークを使用した。遺構・遺物の写真撮影は、中型カメラ（アサヒペンタックス６×７）１台と、小型カメラ（ニコンＦ４０１、Ｆ７０）２台を使用した。使用フィルムはモノクロフィルムが富士写真フィルム株式会社のネオパンＳＳを使用し、リヴァーサルフィルムも同じく富士写真フィルム株式会社のフジクローム１００デイライトフィルムを使用した。また、現場のスナップ写真としての調査状況報告のためポラロイドのジョイカムを使用した。

第４章　　地理的環境・歴史的環境

掛之上遺跡の位置する袋井市高尾の台地上は、明治22年の東海道本線の開通を契機に急激に発展してきた。しかし、それ以前は古い絵図等によると寺院とわずかな白畑・茶畑の広がる寂しい場所で、藪の中には狐の姿が見られたともいわれた。明治22年12月25日の袋井を、著名な俳人・正岡子規が、東京から故郷松山に帰る汽車の窓から眺めて「冬枯の中に家居や村一つ」と、寒村の風景を俳句に読んだと伝えられている。

さて、掛之上遺跡の成立に深い関係を持つのが、遺跡のある台地を取り巻くように流れる二級河川・原野谷川である。この原野谷川は掛川市八高山に源を発し、掛川市街地より流れてきた逆川や垂木川と合流し、さらに宇刈川と沖ノ川の水を集めて南に向きを変え、その先の浅羽町富里で太田川と合流し太平洋へ注ぐ緩やかな流れの中規模河川である。流路を詳しく観察すると、川は袋井市域に入るあたりから洪積層の小笠累層の丘陵を走り、袋井市街より以南では浅羽段丘の西を流れるが、かつてこのあたりは勾配の緩やかな流路が蛇行し、両側には典型的な自然堤防と後背低地が発達していたと言われている。このような環境の中で、遺跡の位置は小笠山から西に派生する丘陵が原野谷川等の小河川により形成された沖積平野に突き出した突端上の平坦な場所に位置している。特に遺跡の位置する「掛之上」付近では流れが丘陵にダイレクトにぶつかって断崖となっている。地元の方の話によるとこの付近の原野谷川の河原を「崖の下」、その反対の上を「崖の上」と呼んだとも言われている。やがて、これらの言葉が訛ってこのあたり一帯の丘陵上を「崖の上」→「掛之上」となったと話す人もおり、これは隣接する掛川市の「掛川」の名が市の真中を流れる逆川の流路が峻しく「崖川」と呼ばれそれが「掛川」になったと言う由来とも関連して興味深い説明である。

掛之上地区での最初の発掘は、昭和49(1974)年７月17日～12月17日に袋井市が当時実施していた駅前土地区画整備事業に伴う事前の調査として、狐塚古墳（前方後円墳）の発掘調査を行ったものである。当時、この崖地に立地する狐塚古墳は原野谷川の流れに後円部の墳丘は削り取られて崩壊していたが、前方部とその周溝の範囲確認調査が実施された。しかし、古墳の周溝調査では弥生時代の方形周溝墓が検出されたため、遺跡名は「狐塚古墳」から「狐塚遺跡」とかわったもので、これがこの地区での発掘調査の契機となった。

原始・古代の周辺の遺跡としては、縄文時代の遺跡が掛之上周辺にはなく豊沢の長者平遺跡（縄文時代中期）がまとまった集落跡となる。そのため今回の掛之上遺跡で出土した縄文時代の石石族（１点）の出所をここまでたどることになるかもしれない。次に弥生時代の遺跡は、大門遺跡や高尾向山の団子塚遺跡など弥生時代中期～後期の大規模遺跡が掛之上遺跡周辺に分布している。これらは集落跡や方形周溝墓等多彩な遺構で、出土遺物の量も多くこの地方の中心的遺跡であることが特色である。古墳時代では後期（６世紀中頃）になると、この地区の古墳文化は最盛期を迎え大門大塚古墳（直径26m）や御所森古墳（直径約20m）等の単独で平坦地に立地する比較的大きい円墳が登場してくる。それ以外では団子塚古墳群のように丘陵の縁部に並ぶ木棺直葬の主体部を持つ小型円墳群や、地蔵ケ谷古墳群・井守塚古墳群のように細い尾根上に点在する小規模円墳群、そして地蔵ケ谷横穴群、金山横穴群等あらゆる古代の葬制をここでは見ることができる。奈良・平安時代は、その可能性のある遺構や若干の土器片は発見されているが確実な遺構は発見されていない。中世は区画整理に伴う試掘調査で陶器、磁器、銅鏡等が表土直下層からの出土しているが遺構の確認は出来ていない。

第5章　遺　　構

今回の発掘調査は袋井南支店建設予定地のうち建築物予定部分のみ約 675㎡のほぼ正方形の範囲の調査を行った。これは、建物の基礎が遺構まで到達して遺跡を破壊するため失われる埋蔵文化財を記録に残すためである。建築物以外は、アスファルト舗装の駐車場・緑地等で工事によって地下の遺物包含層を破壊する可能性がないと考えられるため発掘調査は実施しなかった。

現地・掛之上遺跡の標準的な土層は第１層＝表土（埋め立て土）、第２層＝黒褐色土層（旧畑土など）、第３層＝褐色土（遺物包含層・地表下約40cmの深さ付近で検出される）、第４層＝黄色礫層（基盤層及び小笠礫層）となっている。ここでは試掘調査の結果より、第３層中から多数の遺物が出土しており、第４層上面が遺構確認面となる場合が多い。今回の発掘調査で確認された遺構は次のとおりであるが、全体に遺構の密集度が高く、複数の遺構が重複している場合がある。

（1）　方形周溝墓（ＳＸ１・ＳＸ２）

今回の調査で確認された方形集溝墓は、第４図のとおり調査区が狭いこともあってＳＸ１とＳＸ２の２基のみであるが溝は共有しないタイプである。周溝墓は共に平面長方形の墳丘部であったが上部はすでに削平されており主体部は確認されていない。このうち、周溝墓ＳＸ１の四辺の溝跡は遺構番号０１５（全長 8.0m、幅 1.4m、深さ30cm），０１６（全長 6.3m、幅 1.4m、深さ25cm），０３３（全長 5.8m、幅 1.5m、深さ22cm），０３４（全長 6.1m、幅 1.1m、深さ28cm）の４本で、一部近世の遺構と重複してはいるがほぼ完形で、溝跡の四隅は切れて陸橋部のあるタイプである。周溝墓としての規模は外寸で東西11.3m、南北10.2m、方台部で東西 8.5m、南北 7.8mを測る。もう１基の周溝墓ＳＸ２は遺構番号０４１（全長 4.8m、幅 0.9m、深さ20cm），１１４（現存長 5.5m、幅 1.0m、深さ30cm），１１７（現存長 2.2m、幅 1.0m、深さ33cm），２７７（全長 0.7m、幅不明、深さ26cm）の４本からなり、ＳＸ１と同じく溝跡の四隅は切れて陸橋部のあるタイプであるが、北側の２本の溝跡は調査区外に一部が及び未調査である。周溝墓としての規模は外寸で東西 9.5m、南北 8.0m、方台部で東西 7.2m、南北 6.0mを測る。各遺構より弥生土器の出土があるが、そのほとんどが中間層よりの出土で溝底部よりの出土は見られないため溝跡が埋没する過程で墳丘上にあった土器が落ちたものと考えられる。

（2）　環濠跡（００１）

溝跡００１は調査区北西より南に下がりＬ字形に東に曲がり、周辺の地形や遺構の検出状況から、調査区内の小柱穴跡と組み合わせになる環濠集落になると思われる。この環濠は確認されたところで幅1.80m～1.60m、深さ30cm～40cmの規模であるが、遺構確認面は当時のレベルより下がっているためこの数値より更に深いものと思われる。この環濠では西側を中心に大量の弥生時代後期の土器が出土しており、ミニュチュア土器も含まれることから祭祀遺物とも考えられる。遺物は溝の底部より出土するものはほとんどなく、環濠が埋没し始めてから投棄されたものらしく濠の中間層から出土している。

（3）　小型柱穴群

調査区全体に検出された小穴跡は、住居跡等の柱穴跡と考えられる。平面円形で直径60cm～40cm、深さ20cm～30cmと小規模な遺構である。数か所で住居跡とも考えられる並びが見られるが炉跡等が検出できず確定できない。大部分が弥生時代の遺構と考えられる。

（4） 大型掘立柱建物跡（ＳＢ１、ＳＢ２）

ＳＢ１は、発掘調査区西側で検出された、南北に主軸を同じくする２棟の大型掘立柱建物跡の北側をこう呼ぶこととした。建物跡は、遺構西側に弥生時代の遺構が重複していて、さらに調査区外になる等不安定な要素を持つが、遺構規模としては２間×４間で4.60m×9.40mの大規模建物跡である。柱穴跡の堀り方は平均で一辺1.30m×1.20mの方形、深さ約50mで検出された柱跡の直径は50cmである。柱穴内は黄色土と黒色土を交互に突き固めた様子が断面より確認できる。ＳＢ２はＳＢ１の南側のほぼ同規模の大型掘立柱建物跡である。建物跡は、遺構西側と南側に弥生時代の遺構が重複していて、さらにかなりの部分が調査区外になるが、推定遺構規模としてはＳＢ１と同じく２間×４間で4.60m×9.20mの大規模建物跡である。柱穴跡の堀り方は平均で一辺1.40m×1.20mの方形、深さ約60mで検出された柱跡の直径は50cmで、柱穴内はＳＢ１と同じ工法で黄色土と黒色土を交互に突き固めた様子が土層断面より確認できる。

（5） 掘立柱建物跡

ＳＢ３は、ＳＢ１・ＳＢ２の東側約９mから検出された主軸を同じくする建物跡で、小ぶりな隅丸長方形の柱穴跡を基本とする。建物規模は約6.20m×18.7mで１間×10間の遺構である。一部の遺構は近・現代の遺構と重複して失われているが復元すると全体図のとうりである。ＳＢ３は、ＳＢ１・ＳＢ２と同一の遺構群として巨大建物群の一画を成すものと思われるが、調査面積が狭いことや遺構の性格を示す遺物の出土が無いことなどから今後の周辺調査の結果を見て改めて検討したい。

（6） その他の遺構

検出された遺構の中では、今回は紙面の都合で詳細な報告ができなかったが近世・近代の遺構も含まれている。これらのうち主なものは規模の大きなお屋敷跡、活性炭工場跡、そして農協関係の建物跡などの一部であると考えられる。具体的な遺構としては井戸跡、暗渠跡、建物礎石、建物基礎等が検出された。

第６章　遺　　物

掛之上遺跡出土品の概要はとしては、縄文時代の遺物は中期～後期の石鏃１点のみでその他の縄文土器や石器は発見されていない。また、弥生時代の遺構は、完形品として残る遺物が多く今後の復元作業がたのしみである。今回の発掘調査での特徴として厚い遺物包含層が存在しており、この中からは破片が多く、さらに特徴的な遺物が出土している。

本報告書ではこれらの弥生土器のうち紙面の都合で方形周溝墓（ＳＸ１、ＳＸ２）出土の土器のみを図化した。環濠、掘立柱建物跡、包含層中の遺物については別に機会を見つけて報告したい。

第８図の遺物では１～４は溝跡０３４出土の弥生時代中期の土器である。このうち１～３は壺形土器、４は台付甕の台部で内側にわずかであるがススの付着が見られる。これらの遺物は周溝の底部からの出土ではなく、中間層からまとまって出土している。５、６は溝跡０１５からの出土の深鉢形の甕と器台である。特に５の器台は珍しい器種で底中心部に焼成前に直径７mmの穴が内側から外側に向けて明けられている。本品は最初は甕の台部とも考えたが、たき火の中で使用されたスス等の付着

もないため機能を器台と特定した。７、８は溝跡０１６の出土である。７は大型の壺形土器の口縁部で、８は壺形土器の底部である。以上の８点がすべて方形周溝墓ＳＸ１出土土器となる。この他に小破片が若干あるが別の機会に紹介したい。

方形周溝墓ＳＸ２出土の遺物は９、10、11で溝跡１１４の出土である。溝１１４はいちばん残りが良好であるが、ただし西側で環濠００１と一部重なっている。３点とも壺形土器であるが11のみ底部の木葉痕が残る。

第７章　まとめにかえて

今回の発掘調査は、狭い範囲であったがたいへん密度の濃い調査であった。主な成果をまとめると次のとおりである。

（１）今回の発掘調査といままでの試掘調査の結果を合わせると、掛之上遺跡の時期は縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世、近代と複数の時期にまたがる巨大遺跡であることが推定できる。

（２）遺跡の最盛期の時期は弥生時代・古墳時代である。弥生時代は生活跡である住居跡を含む環濠集落と、墓制を知ることができる方形周溝墓があることが分かり、隣接地で生産跡（水田跡、畑跡等）を確認できれは古代袋井のムラの全容を知ることができる遺跡である。さらに古墳時代も集落跡と古墳の両方を検出できる遺跡であることがかわる。

（３）各遺構出土の遺物の時代としては方形周溝墓は弥生時代中期後半の中遠地方で白岩式土器と呼ばれる時期にあたり、環濠は弥生時代後期のいわゆる菊川式土器の時期にあたる。小柱穴群の時期も環濠と同じく菊川式土器の時期にあたると思われる。掘立柱建物跡のＳＢ１，ＳＢ２，ＳＢ３は柱穴内からの出土遺物が少なく時期の特定が難しかった。柱穴内からはわずかに出土した土師器、須恵器片と混入した多数の弥生土器があり取捨選択すると７世紀末に開始され～８世紀に建て替えを受けた建物群であることが推定できる。しかし、現在の発掘資料だけでは時期を特定することはできず周辺での新しい調査結果が待たれる。

最後になりましたが、区画整理事業の計画段階より埋蔵文化財の保護・取り扱いとその重要性について深いご理解をいただき、また円滑な発掘調査を行うため全面的な協力を申し出ていただいた区画整理課の担当者の皆さんのご配慮に対して、改めてここに記して感謝いたします。

（袋井市教育委員会　永井義博）

（参考文献・引用文献の一部）

袋井市教育委員会ほか1974 『狐塚遺跡発掘調査概報』

狐塚古墳発掘調査委員会1976 『狐塚』（内部資料）

袋　井　市　役　所1983 『袋井市史』 ── 通史編 ──

袋井市教育委員会1983 『掛之上遺跡Ⅱ』 ── 袋井市掛之上遺跡第２次調査報告書 ──

袋井市教育委員会1983 『大門遺跡』 ── 大門Ⅰ遺跡第２次調査報告書 ──

袋井市教育委員会1988 『大門遺跡』 ── 袋井市大門遺跡第４次調査報告書 ──

袋井市教育委員会1987 『大門大塚古墳』 ── 昭和61年度基礎資料収集調査報告書 ──

袋井市教育委員会1990 『大門遺跡Ⅴ』 ── 大門Ⅰ遺跡第５次調査報告書 ──

静　　岡　　県1990 『静岡県史』 資料編１　考古１

袋井市教育委員会1993 『袋井の前方後円墳』 ── 袋井の首長を考える ──

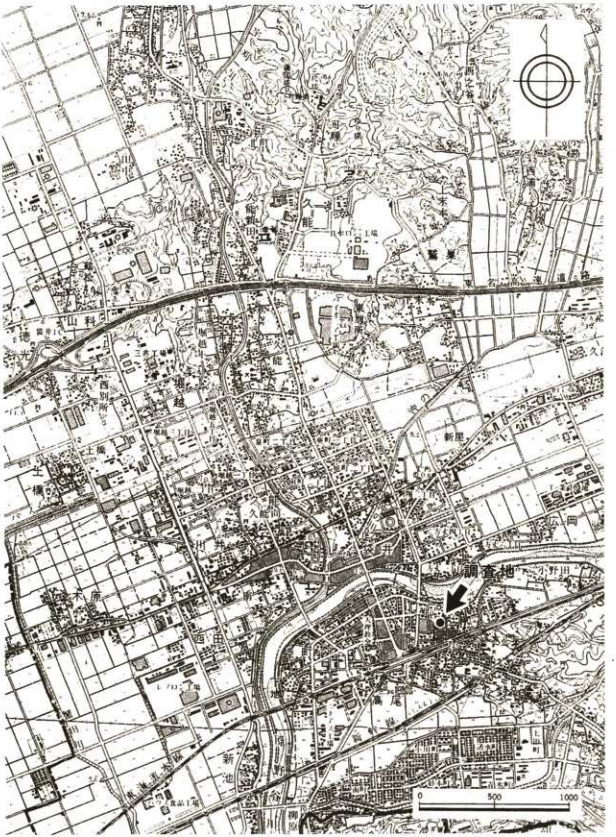
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1998 『掛の上遺跡』 ── 平成９年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

静　　岡　　県1994 『静岡県史』 通史編１　原始・古代

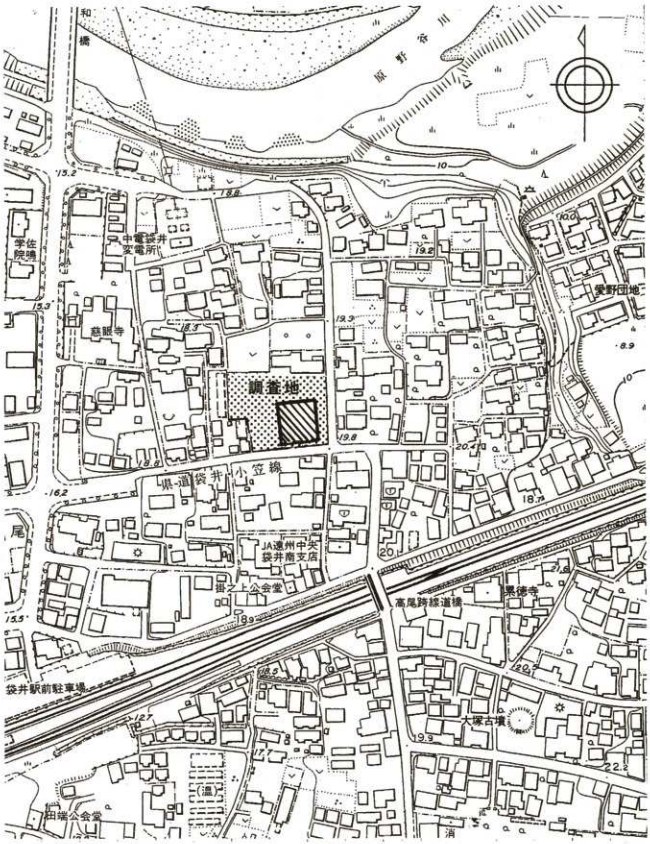
浅　井　喜　作1994 『高部の御所の親王伝説を尋ねて』

山　崎　逸　治1996 『袋井町のれん散歩』

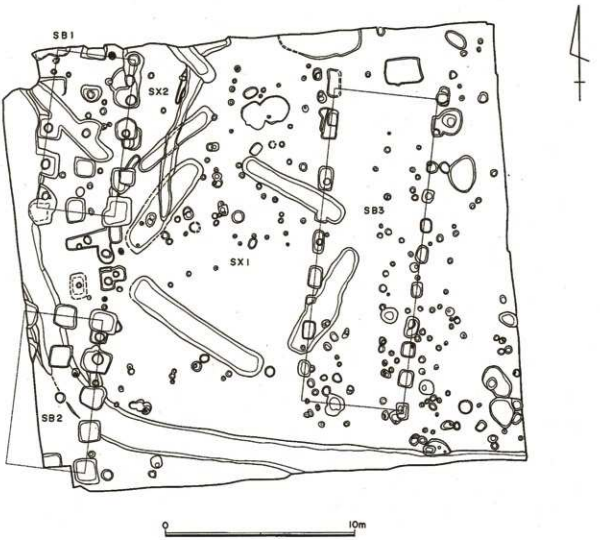
挿　　図



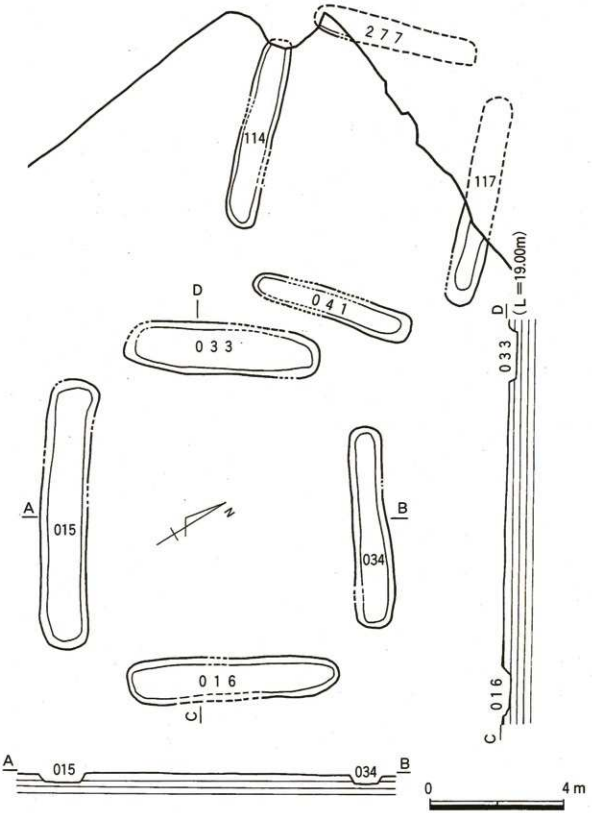
第１図　　掛之上遺跡位置図（1／50,000）



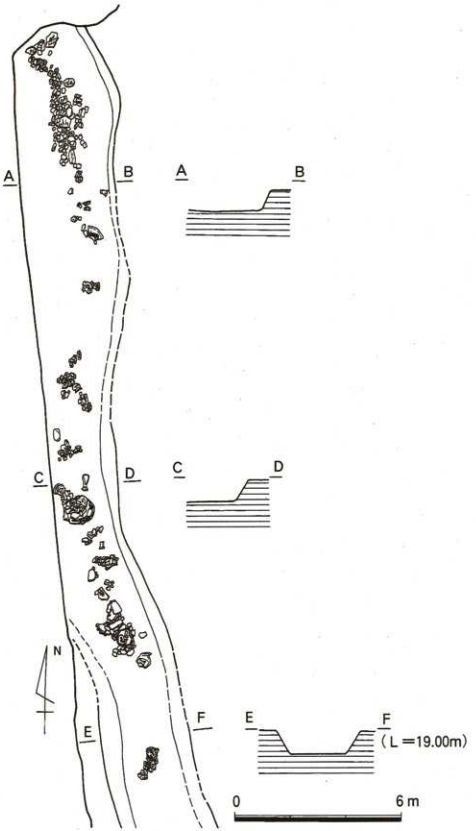
第２図　掛之上遺跡発掘調査の位置（1／2,500）



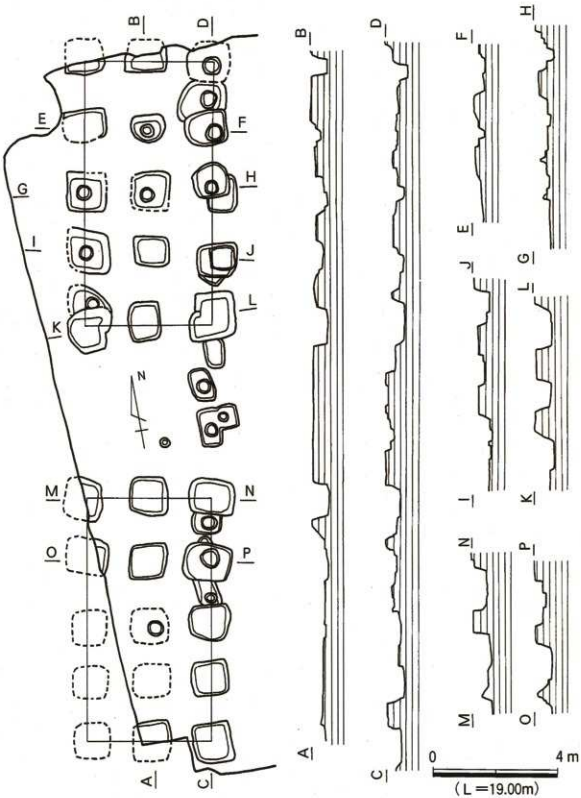
第３図　　掛之上遺跡発掘区全体図（平成11年度調査）



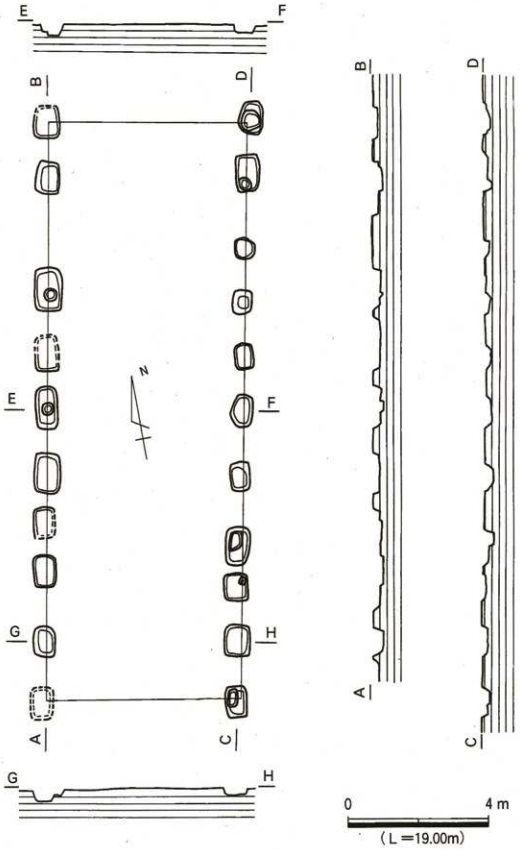
第4図　方形周溝墓（ＳＸ１、ＳＸ２）実測図



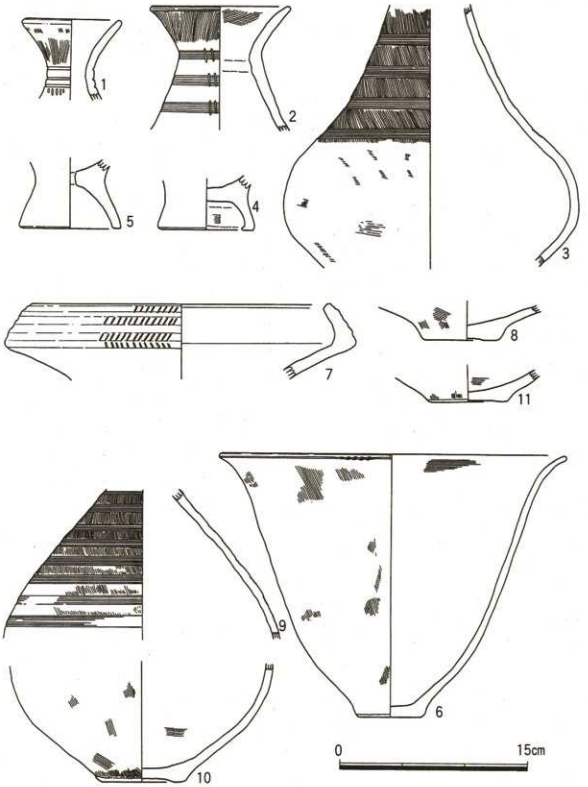
第５図　　環濠（００１）遺物出土状況図



第６図　大型掘立柱建物跡（ＳＢ１、ＳＢ２）実測図



第７図　掘立柱建物跡（ＳＢ３）実測図



第８図　方形周溝墓（ＳＸ１、ＳＸ２）出土遺物実測図

図　　版

発掘調査区全景（北より）

（1）　発掘調査地遠景（東より）

（2）　発掘調査の開始（表土除去作業）

（1）　方形周溝墓（ＳＸ１）全景（西より）

（2）　方形周溝墓（ＳＸ１）の北側溝（No０３４）

（1）　溝跡（０３４）の発掘状況

（2）　溝跡（０３４）出土の弥生中期土器

（1）　環濠（００１）の調査状況

（2）　環濠（００１）出土の弥生後期壺形土器

（1）　環濠（００１）出土の土器。中間層より出土する

（2）　環濠（００１）出土の土器集中地点

（1）　大型掘立柱建物跡　ＳＢ１（北より）

（2）　大型掘立柱建物跡　ＳＢ２（南より）

（1）　大型柱穴跡（№１１２）近景

（2）　大型柱穴跡　中央が２６７、左が２６６、手前が２６５となる

（1）　掘立柱建物跡（ＳＢ３）の調査状況

（2）　掘立柱建物跡（ＳＢ３）の完掘状況（南より）

報告書抄録

ふりがな	かけのうえいせき
書名	掛之上遺跡
副書名	平成11年度　袋井駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書
編集者名	永井義博
編集機関	袋井市教育委員会
所在地	〒437-8666　静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1　TEL 0538-44-3141
発行年月日	平成12年3月28日

ふりがな 所収史跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査 期間	調査 面積	調査 原因
掛之上遺跡 かけのうえいせき	静岡県袋井市 しずおかけんふくろいし 高尾 たかお	22216	151	34° 44′ 24″	137° 55′ 53″	1999 ↓ 2000	675㎡	袋井市駅前第二土地区画整理事業に伴うJA遠州中央袋井南支店移転工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
掛之上遺跡 かけのうえいせき	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世 近世 近代	住居跡、環濠跡、柱穴跡、土壙 溝跡	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 古銭	弥生時代中期後半の方形周溝墓2基と後期後半の集落及び環濠跡。奈良時代の堀立柱建物跡。

掛之上遺跡

（平成11年度袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書）

２０００年３月

編集　静岡県袋井市新屋１－１－１
袋井市教育委員会
☎０５３８－４４－３１４１

印刷　静岡県榛原郡吉田町片岡2210
松本印刷株式会社